松山市教育会情報

発行所　松山市教育会
松山市祝谷町1-5-33
☎ 089－933－0354
発行責任者　亀井壽一
編集　調査研究部

一年を振り返って

副会長
友澤大身

―オーロラに駈けるサムライ―
「ふるさと松山」挿絵より

2011年、10代が選ぶ重大ニュース総合ランクトップ10は、一位が、東日本大震災（地震・震災・津波・3.11等を含む）、二位原子力発電所事故（放射能問題を含む）、三位ＴＰＰ交渉問題、四位「なでしこジャパン」ワールドカップ優勝、五位野田政権発足、六位島田紳助氏芸能界引退、七位タイ大洪水、八位スティーブ・ジョブス氏死去、九位円高関連、九位台風12号による紀伊半島豪雨です。東日本大震災、福島第一原子力発電所の事故のインパクトが強く、他の出来事より関心が強かったようです。未曾有の東日本大震災、死者15,000人以上と戦後最大の震災、さらに津波による福島第一原子力発電所事故は、復興、事故解決への途上であります。日本赤十字社に寄せられた義援金、262万件、3,024億円（12月８日）、国民の意識の高さが伺えます。災害が多かった一年、「絆」でみんながつながり始めたと感じています。

松山市教育会は、第１回教育研修として、８月４日、松山市消防局防災対策課災害対策指導監鳥生幹生氏をお招きして、今後30年以内に起こるであろう南海地震に備えるため、「災害に強くなるための方策」と題してご講演をいただきました。

また、第４回教育講座１として、昨年度に引き続き、石丸淳先生の「学級経営力を考える（その２）」と題してご講演をいただきました。教育講座２として、松山市教育委員長の金本房夫先生から「鳥は真空では飛べない」と題してご講演をいただきました。いずれも、会員にとって興味深く、示唆に富んだものであったと思います。

2011年は、真珠湾奇襲攻撃、日米開戦70周年にあたります。「敵対」から、「和解」そして、「同盟」と歴史は流れていきますが、忘れてならない戦争の傷跡が人々の心に残っています。風化させてはならない戦争の歴史があります。「えひめ教育の日」関連行事、「松山教育フォーラム２３」では、「あの戦争から遠く離れて」の著者である城戸久枝氏と主人公である著者の父城戸幹氏のお二方によるご講演をいただきました。「事実は小説より奇なり」戦中、戦後の歴史を背負い、翻弄されながら生きて抜いてこられた城戸幹氏の生き方に学ぶべきものが多くありました。

松山市教育会は、福利厚生部の活動として、囲碁大会、俳句交換会、ヨガ講座、大正琴講座、川柳教室等も開催しています。ＯＢ会員と現職会員が強い「絆」で結ばれ、さらなる新たな交流が深まることを願っています。

平成23年度　報賞者

（五十音順）

松山市教育会

森田　雅幸 先生
副会長

亀田　勝豊 先生
理　事

（道後支部）
光宗　孝男 先生
支部長

（清水支部）
山本英津子 先生
事務局長

（素鷺支部）
大島　　進 先生
事務局長

（堀江支部）
掛水　高志 先生
事務局長

（伊台支部）
伊賀上郁夫 先生
理事・事務局長

（味生第二支部）
故 小玉美知子 先生
事務局長

「えひめ教育の日」記念事業

「まつやま教育フォーラム２３」高齢慶祝者名簿

白寿・傘寿

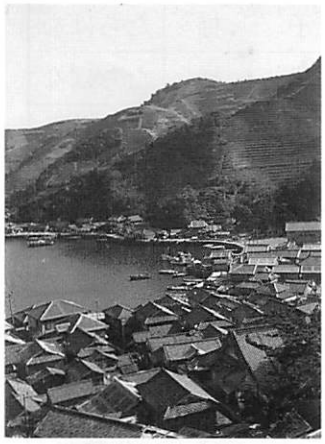
No	氏名	支部	No	氏名	支部
白寿	岡田好春　様	小野	傘寿	横山良隆　様	石井
傘寿	朝雲トナ子　様	味酒	傘寿	長尾フミ子　様	たちばな
傘寿	丸山英俊　様	味酒	傘寿	中崎忠雄　様	たちばな
傘寿	玉井洋子　様	味酒	傘寿	楠本英雄　様	石井東
傘寿	田内逸信　様	味酒	傘寿	関井順子　様	石井東
傘寿	高須賀嘉夫　様	八坂	傘寿	林　恒美　様	北久米
傘寿	上野　亮　様	八坂	傘寿	井上孝行　様	北久米
傘寿	松友順三　様	新玉	傘寿	井口美奈子　様	北久米
傘寿	田村一雄　様	新玉	傘寿	白石澄子　様	石井北
傘寿	仁木省三　様	清水	傘寿	関　恭子　様	石井北
傘寿	山口　勇　様	清水	傘寿	武智恭子　様	みどり
傘寿	山口芳江　様	清水	傘寿	白石千古　様	みどり
傘寿	清水浩夫　様	高浜	傘寿	和田カズ子　様	みどり
傘寿	内藤晴夫　様	味生	傘寿	峯本高義　様	みどり
傘寿	松原静子　様	味生	傘寿	明神マサカ　様	福音
傘寿	関井　巌　様	桑原	傘寿	岡野順子　様	福音
傘寿	永井満彦　様	桑原	傘寿	堀内直幸　様	双葉
傘寿	酒井弘子　様	生石	傘寿	松浦浩二　様	双葉
傘寿	星加雄光　様	道後	傘寿	田所礼子　様	窪田
傘寿	廣川　登　様	湯築	傘寿	佐藤三夫　様	窪田
傘寿	廣川みや子　様	湯築	傘寿	池田辰夫　様	窪田
傘寿	兵頭八重子　様	余土	傘寿	野村円造　様	窪田
傘寿	和田幸信　様	久米	傘寿	白石七郎　様	浅海
傘寿	三好咲江　様	久米	傘寿	西原順一　様	正岡
傘寿	門田貞美　様	浮穴	傘寿	越智　仁　様	正岡
傘寿	窪田睦矩　様	浮穴	傘寿	中屋多喜男　様	河野
傘寿	寺尾　勇　様	浮穴	傘寿	池内淳三　様	河野
傘寿	和田忠文　様	小野	傘寿	高智文夫　様	粟井
傘寿	中尾ヨシ子　様	小野	傘寿	石川政子　様	粟井
傘寿	宮内正臣　様	小野	傘寿	木戸博隆　様	粟井
傘寿	高市喜好　様	石井	傘寿	沼田保男　様	粟井
傘寿	宮内長夫　様	石井			

思い出の学校

蒋渕（こもぶち）小学校と58人の子供たち

峯本　高義（みどり支部）

昭和30年３月、愛大教育学部を卒業し教師の第一歩を踏み出すことになったが、新採教員の枠は広くなかった。３月末になっても赴任地が決まらない者が多く、私もその中の一人であった。



蒋渕村中心部

４月２日に県教委から、「４月４日に宇和島教育事務所に出頭されたし」との通知があり、初めて宇和島市に向かった。長い長い汽車の旅だった。事務所の管理主事から示されたのが、北宇和郡蒋渕村立蒋渕小学校（現　宇和島市立）である。

布団袋と柳行李だけを持って着任できたのは、入学式の前日であった。宇和島港から海路２時間30分、三浦半島の最先端にあるこの学校は、木造２階建て新・旧２校舎からなる学級数11、児童数360人、教職員15人の大規模校であった。

始業式のあと、私を待っていたのは５年生58人、元気一杯の子どもたちだった。教室は子どもと机で満杯になり、机間巡視もできない状態で、参観日は廊下からの参観だった。「みんな仲良く頑張っているのに分けるのは可哀想」との校長の思いやりで卒業まで持ち上がりで担任することになった。中学卒業後はそのほとんどが“金の卵”として、阪神方面に集団就職し、県下に残っているのは５名だけである。今でも同級会には家内同伴で招待されるし、年賀状もたくさんくる。私の人生の中で一番絆の強い子どもたちだ。

松山管内に移動するまでの５年間は、結婚、長男の誕生など思い出に残ることばかりだ。特に新設された特殊学級の担任者となったことは、その後の人生を決定づけることになった。県教委障害児教育課、附属養護学校、退職後の障害者施設勤務などその礎となった学校である。

千丈小学校の思い出

横山　良隆（石井支部）

私が一番最初に勤めた学校は八幡浜市の千丈小学校である。昔は一日に７～８本しかなかった蒸気機関車の引く普通列車（特急はもちろん急行や準急もなかった）で夜昼トンネルを抜け、千丈駅を過ぎるとすぐ右に見える学校である。

この学校には６年間いて、主として高学年を担当したが、年によって多少の差はありはしたものの、子どもたちは素直で真面目な子が多く指導に困ることはあまりなかった。

思い出は多くてきりがないが、特に印象に残ったことをあげると、５～６年生の希望者が夏休みに行う出石寺登山がある。千丈小から八幡浜市内・名坂峠・喜木・日土を通って標高820ｍの出石寺まで歩いたのだからえらいものである。

昭和33年７月

その夜はお寺に一泊、翌朝は３～４人の僧侶が唱える般若心経を神妙に聴いたあと精進料理をいただいた。その後、掃除をしたり和尚さんの法話を聞いたりした。

帰途は来た道ではなく平野（ひらの）のほうへ回り郷峠（ごう）から郷へ下り学校へ帰ったが、毎年、その途中で近道をするため農家の牛小屋の中を通り、数頭の牛に児童たちとおどけたあいさつをしたのも懐かしい思い出である。

もう一つ、当時は毎年３学期に学芸会があったのだが、昭和34年のこと、劇中歌を児童みんなで知恵を出し合って作詞・作曲をしたことがあった。当時の楽譜は残っていなかったのに、平成３年に33年ぶりに開いた同級会の席で、３番まであったその歌詞を全部覚えていた者がいて、早速その場でコピーし、持参していた小生のアコーデオン伴奏で大合唱したのは感動ものであった。

今思えば、学習指導も生徒指導も不十分なことばかりであったが、児童との真剣な活動は数枚の写真とともに私の宝物とし一生消えることはない。

マンモス校だった石井小の思い出

白石　澄子（石井北支部）

見渡す限り田園が広がり、農家の集落が点在する農村だった石井に、大規模な団地があちこちにでき、急速に人口が増え始めた頃に、石井小へ転勤になった。新校舎建築中で、運動場は狭くなり、プレハブの教室が建っていた。

初めてプレハブ教室で教えることになった。夏が近づくと、屋根には時間を決めて水が流され、暑さをしのぐように配慮されていた。学年内で、学期ごとに教室を交代するので、落ち着きがなく、活発に児童が動けば揺れを感じ、戸の開閉にも注意を要した。

新校舎が完成し教室不足は解消したものの、児童数は年々増加し続けた。

赴任から5年目がピークで新入生が450余名もあり、11組の編制となった。担任の6年生を見送った私に、今度は1年生を持つようにと。それも11組である。1年生の教棟は1・2階で10教室しかない。渡り廊下でつながっている6年生の教棟の1階のあいた東側のすみが11組の教室である。

マンモス石井小は有名で、11組の新入生というので、テレビ局が取材に見えた。保護者にインタビューして、教室で児童一人一人に教科書を手渡す様子をカメラにおさめて帰った。夕刻にはニュースを見たと友達からの電話がたくさんかかってきた。映った私は、とうとうその映像を見ることができなかったのが心残りである。運動会、遠足、検診等の集団行動には、待つ身のつらさとともに、最後尾でいろいろと気を遣い、疲れた。配布のプリント、行事予定表など、11組に回ってくる頃は足りなかったり、連絡が遅かったりといろいろ大変だった。

年が明けて新設校（椿小）ができ、古川・和泉の石井小の児童とともに、私も椿小に赴任した。

その後も児童の増加は続き、石井地区には1校だった小学校が4校もできた。田園は都市化されにぎやかになった。

傘寿を迎えた今でもマンモスだった石井の様子が目に浮かび、懐かしい。

立間中学校の思い出

池田　辰夫（窪田支部）

私が今までに勤務した学校の中で一番印象に残っているのは、新採で赴任した立間中学校（北宇和郡立間村立、現在は吉田町）である。

当地は、愛媛みかん発祥の地で、温州みかんの栽培が盛んで、本格化したのは、明治10年頃からと聞いている。秋の収穫期に、近くを自転車で通りかかると、「先生、チョット来て、みかんでも食べてみなはらんか」と懐かしい、親しみのある南予弁で呼び止められて、みかんの摘み方なども教えてもらったことを憶えている。

当時、全校生徒が180人ばかりの小規模校であったが、生徒は素直で、明るく、純朴そのものであった。

新任式で、校長先生から、「この先生は、今年、大学を卒業したばかりの、新進気鋭の先生で・・・」と生徒たちに紹介された時の緊張感は、今もはっきりと記憶に残っている。

最初の一年間は、新採教員への思いやりか、学級の副担任として、教頭先生から、懇切丁寧に、学級経営、その他について指導して頂いたことを、有難く、懐かしく思い出される。

町内の年中行事の中で、忘れられないのは11月3日に、八幡神社で行われる秋祭りである。早朝、午前6時からの、有名な「卯之刻相撲」を見ることはできなかったが、7時から始まる、380余年の歴史を持つ「鹿の子踊り」は、興味深く見たものであった。

この踊りの中には、かわいい小学生（3～4年生）の子もいたようだ。

八幡神社での宮出しの行事もすばらしく、3台の神輿が、大勢の元気な若者に担がれ、102段の石段を勢いよく下りてくる光景は勇壮で、今も鮮明に、脳裡に焼きついている。

「えひめ教育の日」記念事業〈まつやま教育フォーラム23〉講演会

H23.11. 5.（土）　文教会館にて

あの戦争から遠く離れて

城戸　幹氏・城戸　久枝氏

城戸　久枝さんと城戸　幹さん

講演　内容

1　養母スーチンとの出会い
2　貧乏な暮らし
3　「日本民族」であるため大学進学断念
4　文化大革命中の危機
5　養母スーチンとの別れ
6　本当の両親との再会
7　日本で暮らすことの厳しさ
8　父と中国の関係を受け入れられない娘
9　「あの戦争から遠く離れて」出版
10　父と私が紹介したい言葉

講演は、1976年日本生まれの日本人女性であり、「あの戦争から遠く離れて」の著者である長女城戸　久枝さんが尋ね、中国名「孫玉福（スン　ユイ　フー：そんぎょくふく）」中国残留孤児である父親城戸　幹さんが答えるという形式でお話が進んでいきました。講演内容の一部を紹介します。

城戸　幹さんのお話から

城戸　幹さんは、1941年に城戸家の長男として満州国で生まれました。父親は満州国軍の軍人でした。1945年３歳９カ月のとき、日本は敗戦を迎え、戦争末期の大混乱の中、城戸家の家族はばらばらになってしまいました。両親と別れ、孤児となった幹さんは、日本人の子どもだということで牡丹江に投げ込まれそうになるというような危機一髪の体験をしました。その後、中国女性の養子にもらわれて行きます。養母の名前は「スーチン」です。養母の家は子どもはいません。とても貧しく、年収は日本円で今の4,000円くらいでした。主食はトウモロコシと粟、氷点下30度の極寒の中でも母の手作りの薄い衣服・・・。養母はとても働き者で、いじめられてもいつもかばってくれました。そして、成長するにつれ、彼の抜群の才能が芽生え、村では珍しい特待生として授業料免除で中学・高校へと進みました。貧しさ厳しさの中で養母の大きな愛を感じて成長しました。幹さんの夢は、「大学に行って、お金をたくさん稼いで親孝行する」ことでした。

しかし、「日本民族ある」という理由で、受験した全ての大学で不合格。あとでは北京大学にも合格ラインを突破していたことが判明しました。しかし、日本人であるというだけで夢を閉ざされてしまいました。「打倒！米国・日本」を掲げた文化大革命、いつ命を落とすか分からない毎日が続きました。そんな中、幹さんは日本への帰国を決意したのです。

1970年、日中国交正常化の２年前のことです。赤十字社に何百通もの手紙を書くなど、あらゆる手立てを講じ、決して諦めず、1970年３月、祖国日本への帰国が認められました。しかし、それは４歳から25年間一緒だった養母スーチンとの別れを意味しています。やがて別れの日がやって来ました。駅で泣き崩れながら、「行きなさい。行きなさい。」と叫ぶ養母スーチン。「お母さん、生み

の親も育ての親も関係ない、お母さんが、私の顔、私の手です。」つらい別れを経て、祖国日本へ帰る夢を果たしました。

城戸　幹さんは、日本に着いたその日、胸に3つの夢をいだきました。

1　まず、中国のお母さんにたくさんのお金を送る
2　東京へ行って、大学へ行く
3　中国語を生かして通訳になる

しかし、祖国日本には厳しい現実が待っていました。一番は言葉の壁でした。そんな逆境の中でも努力を惜しまず、決して諦めず、松山南高校の定時制に進学しました。そこで奥様と出会い、結婚、そして、昭和51年に長女久枝さんが誕生しました。

城戸　久枝さんのお話から

城戸　久枝さんにとっての父親幹さんは日本人であり、友達のお父さんと何も違わない普通のお父さんでした。子どもの時「あんたのお父さんは中国人？」と友達に言われて否定をしましたが、友達や近所の人からお父さんのことを聞かれることがとてもいやでした。中国のことから意識的に避けるようになり、久枝さんは、お父さんと中国の関係を受け入れることができませんでした。しかし、中学、高校、大学と進むうちに、少しずつ、父親と中国の関係を受け入れることができるようになって来ました。久枝さんは中国に旅行をし、ホームステイをしました。そして、中国を肌で感じ、「父はここで育った。もっと父のことを知らなければ。まず、中国語を話したい。」そんな思いを強くもちました。

大学在学中の2年間、中国に留学し、父親の親戚に大変な歓迎を受け、父親のことを色々話してもらいました。21歳の彼女は、「この父のことを残したい。父ちゃんの本を書きたい。」という思いを強くするのです。父親幹さんは、最初は反対をしました。久枝さんは10年という年月を経て、31歳の時、「あの戦争から遠く離れて」を出版したのです。

〈参加者の感想〉

城戸　幹さんが日本に行くことは、養母スーチンとの別れを意味し、養母が「行きなさい。行きなさい。」と泣き崩れながら言ったとき、両者がどんな気持ちだったかと想像し、胸が痛くなるようでした。生みの親とか育ての親とか関係ないという言葉から、親子の情愛の深さや大切さを感じ、最後に見せていただいた書「疾風知勁草」から戦争が原因である苦難の大きさを感じました。

戦後65年を経た今日、同じアジアの国として政治的、経済的に密接な関係をもつ中国と日本。「近くて遠い中国、韓国そしてアジア」―そんな言葉をよく耳にします。お互いに距離的には近くて、心は遠い？「この言葉の通り、遠い存在では済まされない。私たちは、戦争について、中国、韓国、そしてアジアの国々ついて、深く知り、理解しなければならない。」「決して、あの戦争から遠くはなれてはいない。」など色々なことを考えさせられました。

養父母との絆、別れ、本当の親子の愛とは何か、考えさせられました。帰国後の新たな夢と、厳しい現実や苦労、中国と父親との関係を踏まえた娘としてしての生き方、大変な貴重な体験の中から、お話をいただきました。

国や民族の違いを超えた養母スーチンと城戸幹さんの絆の強さに感動しました。親子の愛情が普遍的なものであるのに対して、個人の夢や努力は、簡単に踏みにじられてしまうことに憤りを覚えました。残留孤児という言葉もない時代に、困難を乗り越え自ら道を切り開いた城戸幹さんが大切にされている「車到山前必有路」という言葉の重みを感じ、戦争体験を風化させてはいけないと思いました。幹さんの著書も是非読んでみたいです。

ブロック紹介

新しい一歩を

第８ブロック理事　菊池　晶子

第８ブロックは、久米、小野、北久米、福音、窪田小学校の５校と、久米、小野中学校の２校、計７校である。平成20年度新しくブロック編成が行われた。小野支部が理事を、北久米支部が世話役を引き受け、第1回のブロック会を開いた。メンバーは支部長、小学校事務局長、中学校の教頭先生で、各支部の情報交換や今後の活動について話し合った。21年度は松山教育会の総会後まもなくブロック会を開き、各支部での取組の紹介をはじめ、各支部で現職と合同で行っている行事を知らせあい、参加を呼びかけることになった。ちなみにこの年は、北久米小学校音楽会にＯＢも参加をしているので、各支部長に呼びかけ参加していただいた。22年度は同じく総会後、世話役福音支部長のお世話のもとブロック会を開いた。理事は北久米支部が担当になった。各支部の行事へのお誘いはもとより、10月には関谷省三先生を講師にお招きし「川柳の会」を行った。支部長、事務局長、およびＯＢの方々に参加していただいた。23年度は、11月に「そらともり」にて情報交換および初めて懇親会を開催した。ゆっくり食事をしながら、現職・ＯＢ各支部の方々と交流を深めることができた。支部の会員が減少する中、ブロックに拡大したことで更に輪が広がりおおいに盛り上がり、来年も懇親会をしようということになった。

新ブロック編成になってから定例支部長会の後、それぞれのブロックで話し合う機会がもてるようになり、ブロック内の支部長同士随分気軽に話せるようになった。これは、ブロック相互の情報交換等もできて、とても良かったと思う。

今後は、ＯＢ会員相互の交流はもとより、学校や現職の先生方への手助けができればと願っている。

ふるさと松山学

松山には、こんなにもたくましく生きた人々がいる、すばらしい文化がある、誇れる郷土がある。

朝の読書、国語、道徳など、いろいろな時間に本を広げる子どもたち。文化祭で演劇に取り組んだ学校もあります。それぞれの時代をたくましく道を切り開きながら生きてきた人々。志をたて、自らの信念を貫き、夢を追い、ひたむきに生きる人々の考え方、思い、行動。様々な生き方を知ることで、子どもたちに夢のある未来を描いてほしいと願っています。

「語り継ぎたい　ふるさと松山　百話」で取り上げている人々

凛として立つ

・青地林宗　・中江藤樹　・安倍能成　・西村清雄　・山路一遊　・秋山好古　・八木繁一
・三上是庵　・宮本武之輔　・久松定謨　・新田長次郎　・安長九郎左衛門　・今村久兵衛
・河野通有　・伊佐庭如矢　・森宗勘　・山内与右衛門　・加藤恒忠

人の活　まちの粋

・尭音和尚　・鍵谷カナ　・小林信近　・和田重次郎　・一遍上人　・予州亥之助
・森盲天外　・秋山真之　・岡田十五郎　・三輪田米山　・吉田蔵沢　・明月上人
・杉浦非水　・伊丹万作　・伊藤大輔　・丸山定夫

嬉しきは故郷なり

・正岡子規　・高浜虚子　・河東碧梧桐　・村上霽月　・石田波郷　・種田山頭火
・内藤鳴雪　・中村草田男　・高橋一洵　・松平定直　・栗田樗堂　・水野広徳
・桜井忠温　・今井つる女　・松根東洋城　・押川春浪　・景浦将　・筒井修　・桑原寛一

読みたい方はご連絡ください。

問い合わせ先：松山市教育委員会学校教育課　TEL　９４８－６５９１